

学校体育におけるサッカーの指導の教育内容と 教材の変遷に関する一考察

佐藤 亮平¹, 近藤 雄一郎²

A Study on the Transition of Educational Content and Materials of Soccer Instruction in Physical Education

Ryohei Sato¹, Yuichiro Kondo²

Abstract

The purpose of this study was to examine the change of the teaching content and teaching materials of Soccer for Physical Education. The method was described as below : the subject of materials was Journal of Physical Education. Review period was from 1957 to 2013. It was classified into the two periods. First period was from 1957 to 1977. Second period was from 1977 to 2013. The points of review were the teaching content and the configuration of teaching materials. Results described as below : In the first period, the main teaching content were positioned the technique, and the configuration of teaching materials was process from the technique to the game. In the second period, the teaching content were mainly the technique and the tactics, and the configuration of teaching materials were mainly the game. In this way, teaching content were included not only technique but also tactics. In addition, the configuration of the teaching materials were changed from the techniques to the game to game-based. However, it is considered that these researches have three problems. First, it is necessary to clarify the structure of the technique and the tactics of soccer in order to extract the teaching content. Second, it is necessary to configure the teaching materials from the interaction between offense and defense. Third, it is necessary to re-examine the teaching content and the teaching materials configuration in the technique and the tactics of the defense.

Key words : Soccer, Technique, Tactics, Method of Instruction, Physical Education

1. 緒 言

わが国におけるサッカーは、日本サッカー協会を中心に日本代表を強化するための選手育成として「競技スポーツ」における実践や、自己の技能レベルに応じたリーグに所属できるように社会人リーグの整備といった「生涯スポーツ」の両方の面からサッカーに取り組める環境

の整備に努めている。また、日本サッカー協会は公認指導者養成事業を展開しており、より良い指導を実践できる指導者を養成し、日本サッカー界の選手育成やサッカーに関わるサッカーファミリーの拡大も目指している。このような活動のほかに、小学校体育におけるサッカーの学習指導の支援をし、その内容について『サッカー指導の教科書』にまとめている（日本サッカー協会、

1. 北海道大学大学院
〒001-0011 札幌市北区北11条西7丁目
2. 北海道大学大学院教育学研究院
〒001-0011 札幌市北区北11条西7丁目

1. Graduate School of Hokkaido University
Kita-11, Nishi-7, Kitaku, Sapporo, 001-0011
2. Faculty of Education, Hokkaido University
Kita-11, Nishi-7, Kitaku, Sapporo, 001-0011

著者連絡先 佐藤 亮平
sato.ryohei.0317@hotmail.co.jp

2014).『サッカー指導の教科書』では、サッカーの授業を、ウォーミングアップ、活動1、活動2、ゲームといった4パートで構成している。この「教材の構成」については、「原則として単元全体のねらいからの逆算を意識したもの」になっている(日本サッカー協会, 2014, p. 15)。また、学校体育全体の見通しとして、サッカーを生涯スポーツにつなげるために「その学年、その子に応じた『楽しむ』」を積み上げることが必要であることを示し、楽しむことの積み上げは「技能(技術や関わり)が向上していくこと」であり、その技術の向上が生涯スポーツにつながることにについても述べている(日本サッカー協会, 2014, p. 10)。次に、具体的に各学年のねらいについてみてみると、「ねらって思いきりキックしよう(1年生)」、「どんだんドリブルしよう(2年生)」を位置づけ、中学年では「パスをしよう(3年生)」、「シュートをしよう(4年生)」とし、高学年では「グループで突破しよう(5年生)」、「空いているところから攻撃しよう(6年生)」が位置づけられている(日本サッカー協会, 2014, p. 16)。また、これらのねらいに応じて、1年生では「ボールフィーリング」「ターゲットキック」「3対3」、2年生では「川渡りドリブル」「ナンバーコールゲーム」「3対3」というように学年に応じて各パートにおける構成も行われている(日本サッカー協会, 2014, p. 17)。

しかし、上記のようなねらいや各パートに位置づけられている指導内容が、サッカーの指導においてなぜ位置づけられるのかについては明確に説明されていない。このように、日本最大のサッカーの組織であり、指導者養成事業も行っている日本サッカー協会の指導書において、先に指摘した点の説明がないことは、指導の大部分が指導者の主観に委ねられ、指導に当たる指導者の力量によって指導水準が大きく異なることにもつながる可能性があるため、サッカーの学習指導の支援としては不十分であるといえる。

一方、学校体育においてサッカーは、戦後から一貫して球技領域における運動種目の1つとして位置づけられている。そのため、多くの子どもたちが学校体育の授業を通してサッカーというスポーツの経験を有しているといえる。学校体育では、1958年の学習指導要領改訂以後、学習指導要領が法的拘束力を持ち、その指導内容等について規制を受けながら体育の授業は展開されており、サッカーの指導についても学習指導要領の影響が反映されている。そこで、サッカー及びバスケットボールに示されている技術や戦術といった内容の変遷について、戦後から現行の学習指導要領までを対象とし、その内容の位置づけについて検討している研究として、宗野ら(2014)の研究をみてみると、学習指導要領におけるボールゲームでは、ゲームの質を向上させることを目指し、技術や戦術を位置づけてきたが、技術や戦術といった内容が従来から一貫して積み上げ式であるため、ゲー

ムそのものを指導する新たな観点の創出の必要性があることを指摘している。

このように、宗野ら(2014)の研究では、学習指導要領における指導内容等について検討する余地があることを示しているが、実際の学校体育におけるサッカーや球技の具体的な授業、すなわち、指導内容や教材構成が内包されている指導実践や指導理論については、言及することが出来ていない。したがって、戦後から学校体育における指導実践及び指導理論を対象として、そこにおける指導内容や教材構成について検討することが、サッカーの指導理論構築のために必要であるといえる。

また、学習指導要領においても指導内容及び教材の構成について日本サッカー協会と同様の課題もある。それは、教える対象として位置づけている技術や戦術がなぜ位置づけられるのかについて説明されていない点である。その点も含めて、学校体育における指導理論も未確立といえる。

以上のことから、本研究では学校体育におけるサッカーの指導方法や指導実践における教育内容の位置づけと教材の構成方法の変遷を明らかにすることを研究目的とする。

2. 研究方法

研究方法は、1953年に刊行開始された学校体育に関する専門雑誌である『体育科教育』におけるサッカー指導に関する報告を検討対象とする。『体育科教育』を検討対象とする理由は、本誌が多くの体育の研究者や実践者に影響を与えていると考えられること、体育における指導理論や指導実践が報告されていること、現職の教員による創造的な実践が報告されているからである。

検討対象期間は、学校体育が学習指導要領の影響を受けていることを踏まえ、学習指導要領における目標の変遷の特徴について報告している友添(2010)に学び、「新体育期(1947年要綱, 1949, 1953年要領)」「体力づくり期(1958, 1968年要領)」「楽しい体育期(1977, 1988, 1998, 2008年要領)」の3段階に分類しとらえることとする¹⁾。しかし、『体育科教育』は1953年から発刊が始まったことから「新体育期」の時期における報告が限定されるため、1957年から2013年までに刊行されたものを検討対象とし、上記区分の「体力づくりを重視した目標」及び「楽しさを重視した目標」の2つの時期を検討対象期間とする。

各報告の検討視点は教育内容²⁾の位置づけと教材³⁾の構成についての検討を行う。教育内容については、教材やトレーニングメニューと独立して記載されているかどうかについて確認し、教育内容の対象として何が位置づけられているかについて整理する。その際、記載されている教育内容が、キックやドリブルといった技術的内容あるいは、戦術的内容であるか分類し、文献数を集計した。

また、検討対象となる文献の教育内容がどのように構成されているかも検討する。さらに、教育内容の構成について記載されている場合は、どのようにして教育内容が抽出されているかについても記載があるか確認する。

教材の構成については、例えば授業の開始から終了までに行う教材がどのような順序で配列されているか、あるいは単元全体の教材がどのような配列であったかという、教材の構成について検討する。そして、教材の配列がどのような配列であるかを分類し、文献数を集計した。

3. 結 果

1957年から1977年までの「体力づくり期」と1978年から2013年までの「楽しい体育期」におけるサッカーの指導方法及び指導実践の報告結果について、以下に概観する。

3-1. 体力づくり期

「体力づくり期」では、生活中心の経験主義教育によ

る基礎学力の低下が問題とされたことによる「科学の体系を重視する系統主義教育への転換」が起き、体育科においても運動技術や運動能力の向上が目指された時期である（友添，2010，p. 32）。この時期におけるサッカーの指導方法及び指導実践の報告は37本あった。全報告の中で、教育内容において技術を位置づけている報告が23本、戦術に関して述べている報告が1本あった。しかし、教育内容の抽出方法は、丹下ら（1963）以外を除いて、明確に記載しているものが無かった。丹下ら（1963）に関しては、実践や技術分析に関する先行研究の成果から、サッカーの攻撃の技術体系を提起していた。教材の順序については、技術練習を行ってからゲームへ移行していく順序で行うとする報告が18本と半数以上占めており、ゲームを中心に教材構成する報告は8本であった。このように、この時期のサッカーの指導方法及び指導実践は、主として技術を教育内容に位置づけ、技術練習に関する教材からゲームによる学習に教材を展開するという教材の構成が多数であった。

表1 体力づくり期におけるサッカーの指導方法及び指導実践

年代	No.	著者名 (掲載年月)	タイトル	対象者	教育内容	抽出 方法	教材の順序
1950 年代	1	多和健雄 (1957.2)	サッカーの技術指導—始めて サッカーを教える教師のための 手引き—	記載なし	キック、トラップ、ヘディング	記載 なし	技術→ゲーム
	2	多和健雄 (1957.11)	中学校のサッカーでは、何を、 どこまでどのように、指導した らよいか	中学生	キック、トラップ、ドリブル、ヘディ ング	記載 なし	個人→集団→ゲーム
	3	多和健雄 (1959.1)	サッカー系のボールゲームにつ いて	小・中 学生	キック、ヘディング、トラップ、タッ クル	記載 なし	技術→ゲーム
	4	小林勝意 (1959.12)	サッカーの策戦指導について	記載なし	チーム戦術	記載 なし	記載なし
1960 年代	1	須貝光一 (1960.2)	サッカーの初歩の扱い	小学生	キック、トラップ、ドリブル、ヘディ ング、タックル、動き	記載 なし	個人→集団
	2	多和健雄 (1960.11)	中学校のサッカー	中学生	キック、ドリブル、ヘディング、ト ラップ、シュート、パス	記載 なし	個人→集団
	3	北島 豊 (1961.2)	四年生の指導	小学校 4年生	キック、トラップ、タックル	記載 なし	個人→ゲーム→個人→ゲーム
	4	邨上悦夫 (1961.3)	五年生の指導	小学校 5年生	キック、トラップ	記載 なし	個人→ゲーム
	5	須貝光一 (1961.10)	サッカー指導の問題点とその取 扱い法—小学校—	小学生	キック、トラップ、ドリブル	記載 なし	低学年：ゲーム中心に技術習得 中・高学年：練習→ゲームの交 替
	6	鈴木勇作 (1961.10)	サッカー指導の問題点とその取 扱い法—中学校—	中学生	キック、動きながらのプレー、ポジ ションに応じたプレー、ヘディング、 ワンサイドカット	記載 なし	記載なし
	7	多和健雄 (1961.10)	サッカー指導の問題点とその取 扱い法—高等学校—	高校生		記載 なし	記載なし
	8	塚田 実 (1962.1)	「簡易サッカー」	小学校 高学年		記載 なし	ゲームを中心にした学習の提案
	9	松田源恵 (1962.1)	ポートボールとラインサッカー	小学校 中学年	3年生：キック、トラップ 4年生：タックル、チャージング	記載 なし	個人→集団→ゲーム
	10	小野久夫 (1962.2)	「簡易サッカー」	小学校 高学年	5年生：ドリブル、パス、トラップ 6年生：キック、ドリブル、ヘディ ング、タックル	記載 なし	5年生：個人→ゲーム 6年生：個人→ゲーム
	11	西田猛男 (1962.3)	サッカー基礎技術の能率的な指 導について—小学校高学年—	小学校 高学年	キック、ドリブル、トラップ	記載 なし	技術→ゲーム
	12	永嶋正俊 (1962.11)	写真による実技指導サッカー	記載なし	キック、トラップ、ヘディング、ド リブル、ショルダーチャージ、プロッ キング、ゴールキーピング、スロー イン、1対1、2対1	記載 なし	記載なし
	13	西田猛男 (1962.11)	サッカー教材の問題点とその指 導方法について	小学校 高学年		記載 なし	個人→集団→ゲーム
	14	丹下保夫、 浅海公平 (1963.5)	体育指導の理論と実際/その2 運 動技術の指導と系統（上）	小学校	運動文化としてのサッカー	記載 なし 技術 体系	ゲームと話し合い

1960年代	15	丹下保夫, 浅海公平 (1963.6)	体育指導の理論と実際/その3 運動技術の指導と系統 (下)	記載なし		記載なし	単純なゲーム→複雑なゲーム
	16	大淵正雄 (1963.12)	中学校・サッカーの指導	中学校 1年生		記載なし	キック→ゲーム→ゲーム
	17	高山 博 (1963.12)	高校・サッカーの指導	高校		記載なし	コート, ルールを改変したゲーム
	18	高田典衛, 西沢 宏, 庄司正治郎 (1965.12)	小学校のサッカーの教材づくり	小学校	実践の結果から, 中核はドリブルとシュート 低学年: シュート 中学年: ドリブル 高学年: パス	記載なし	実践の結果から 低学年: ゲーム中心に指導 (対陣サッカー) 3年生以降: ラインサッカー→簡易サッカー (様相に応じて発展)
	19	西沢 宏 (1966.9)	子どものための教材づくり—小学校のサッカーについて/その1	小学校		記載なし	ゲーム中心 (ルール等を話し合い等で改変)
	20	秋葉幸次郎, 森 昭二 (1966.12)	二年生のサッカー	小学校		記載なし	技術 (キック) →ゲーム
	21	西沢 宏 (1966.12)	子どものための教材づくり—小学校のサッカーについて/その2	小学校 4年生		記載なし	ゲーム→検討→ゲーム
	22	大熊豊蔵 (1967.2)	サッカー	小学校	低学年: ボールコントロール 中学年: ゲームスキルの基礎+やや組織だったゲーム能力 高学年+中学生: ゲームの組織化+正確な技術	記載なし	記載なし
	23	永嶋正俊 (1967.2)	体育館でできるサッカー	記載なし	キック	記載なし	キックとゲームの教材の提案 (体育館)
1970年代	1	豊田恭久 (1970.3)	運動技術と体力の育成—サッカーを通して	中学校 2年生	キック, トラップ, ドリブル, パス, シュート	記載なし	個人→集団 (2:1, 3:1, 3:2, 5:5) →ゲーム
	2	松田輝幸 (1972.9)	サッカー	初心者	ドリブルとフェイント, ストップング・トラッピング, ワンステップキック・インサイドキック	記載なし	ドリブル等: ボールフィーリング ストップング・トラッピング: リフティング キック等: リフティング・ボレーキック
	3	中村敏雄 (1972.12)	サッカー指導における第一の段階	初心者	パス, トラップ, サポート	記載なし	トレーニング・プレーの提案
	4	中村敏雄, 菊池 浄 (1973.4)	サッカーの授業—小学校6年	小学校 6年生		記載なし	2対0→3対0→4対0 (モデル)
	5	永嶋正俊 (1973.6)	ミニサッカーについて	学校体育		記載なし	3人→4人→5人→6人 (ゲーム) ミニ・サッカーの提案
	6	佐野雅孝 (1973.11)	ラインサッカーからサッカーへ	小学生	ラインサッカー: キック, トラップ, タックル サッカー: ドリブル, トラップ, キック, フェイント, シュート	記載なし	記載なし
	7	岡田和雄 (1974.3)	私の授業と指導案の工夫—教えることと考えさせること	小学校 6年生		記載なし	個人→集団→ゲーム (守備の強化→コンビネーションの強化)
	8	宇土正彦, 大日方義久 (1976.4)	体育授業の絶対的基準を探る	小学校 5年生	チェックの動き, パス, トラップ, サポート, インターセプト, マンツーマン	記載なし	1対1から7対7まで系統的に進める
	9	奥山英虎 (1976.10)	わかる授業の方法を探って—体育の授業と理科の授業	小学校	2:0→3:0→4:0→2:2→3:3 (典型的方法)	記載なし	ゲーム→2:0→ゲーム→3:0
	10	寺崎五郎 (1976.10)	ゲーム中心とした小学校のサッカー	小学校 5年生		記載なし	個人→集団→ゲーム

*抽出方法は、学習指導要領や児童の実態以外から抽出している物を対象としたため、それ以外のものは記載なしとした。

3-2. 楽しい体育期

楽しい体育期は、70年代以降の脱工業化社会への転換による人々の生活の変化や「スポーツが社会や文化の重要な一領域として認知される契機」を生み出し、欧米諸国で起きた『『スポーツ・フォー・オール (sports for all)』運動』が、「スポーツが運動や健康のためだけでなく、生涯の楽しみとして享受すべきとする生涯スポーツの理念に結実していった」時期である (友添, 2010, p. 33)。この時期のサッカーの指導方法及び指導実践の報告は61本あった。教育内容において技術を位置づけている報告は9本あり、技術と戦術の両方を位置づけている報告は13本あった。戦術を教育内容の中核として位置づ

ける報告は1本であった。その教育内容を抽出する方法に関しては、明確に記載されているものは無かった。また教材の順序は、技術や戦術練習をした後にゲームを行うとする教材構成の報告が16本、ゲームを中心に教材構成する報告が27本であった。このように、この時期のサッカーの指導方法及び指導実践は、主として技術と戦術の両方を教育内容に位置づけ、ゲームを学習の中心に据えながら、ゲームにおいて生じる技術や戦術に関する運動課題を習得するという教材の構成が多数であった。

表2 楽しい体育期におけるサッカーの指導方法及び指導実践

年代	No.	著者名 (掲載年月)	タイトル	対象者	教育内容	抽出 方法	教材の順序
1980 年代	1	岡田和雄, 平林宏美, 藤井喜一 (1981.4)	低学年のサッカー遊び・その1— 一年生のボールけりあそび	小学校 1年生		記載 なし	個人技術→対相手の技術→サッ カー型のゲーム
	2	松本光弘 (1982.3)	サッカー	年齢別	技術: ボールコントロール, ドリブ ル, キック, ヘディング, タックル 戦術: 周りを見る, 攻守の切り替え, 常に見る, 追う, ボールに, 寄る・ 弾ませない, 読まれない, パス&ムー ブ, 事前準備, 指示, カバーリング	記載 なし	記載なし
	3	堀江邦昭 (1983.11)	全員で楽しめるサッカー型授業 の作り方	小学校		記載 なし	ゲーム→分析(練習課題の把握) →練習
	4	永嶋正俊 (1984.3)	ボール運動の重点教材	学校体育	グループ戦術を中核に据えることを 提案	記載 なし	記載なし
	5	きし・さとる (1984.9)	サッカーの学習における教師の 指導力	学校体育		記載 なし	ミニゲーム(問題発見)→練習 (パターン)→ミニゲーム→練 習(個人の特徴)→ミニゲーム (戦術的問題の発見)→リーグ 戦(学習の流れ基本技能→応用 技能)
	6	青木 真 (1985.9)	競争を支える学習環境6・サッ カーの授業づくり1	小学校		記載 なし	記載なし
	7	青木 真 (1985.10)	競争を支える学習環境6・サッ カーの授業づくり2	小学校		記載 なし	ゲームと作戦の練習
	8	堀江邦昭 (1987.4)	学級集団の活性化とグループの 再編	小学校 2年生		記載 なし	ゲーム中心
	9	佐々木忍 (1987.4)	個人差に応じた場の工夫	中学校 1・2年生		記載 なし	ゲームの COURT の工夫(グリッ ド方式とウイングゾーン)
	10	堀江邦昭 (1987.8)	学習形態を工夫した体育の授業 —チーム目標達成をめざして	小学校 6年生	3人の攻撃モデル: シュート, スロー イン, CK のパターン	記載 なし	練習→ゲーム
	11	中村康弘 (1987.8)	サッカー —チーム再編成について	小学校 6年生		記載 なし	ゲーム中心
	12	金子 清 (1987.9)	ラインサッカー	小学校		記載 なし	ゲーム中心
	13	細江文俊 (1988.5)	「基礎・基本」の充実から「個性化」 教育への授業づくり— 船橋市立八木が谷中学校の実践①	中学生		記載 なし	ゲーム→作戦練習→ゲーム
	14	細江文俊, 川城 健 (1988.7)	サッカーの場づくりに着目した 個に合わせる指導の工夫	中学生		記載 なし	ゲーム中心
	15	中村康弘 (1988.8)	ボール運動における場づくり 工夫を中心に	小学生		記載 なし	ゲームの工夫(COURT やルール)
	16	川城 健 (1988.12)	ボール運動の学習過程をどう工 夫したらよいか —小学校五年生のサッカーを例に	小学校 5年生		記載 なし	作戦→練習→ゲーム(グリッド サッカー) 基礎・基本→自主・選択
	17	関川正巳 (1988.12)	ボール運動の授業をどう評価す るか	小学校 6年生		記載 なし	練習→ゲーム1→反省・練習→ ゲーム2
	18	原口雅之 (1988.12)	個人差をゲームの中でどう生か すか —小学校六年のサッカー	小学校 6年生		記載 なし	ゲーム→話し合い→練習→ゲー ム(めあて1) 作戦→ゲーム→練習→ゲーム (めあて2)
	19	中村政一郎, 嘉戸 脩 (1989.1)	画一的な学習活動から多様な学 習活動への試み	中学生		記載 なし	1年次: 練習→ゲーム→作戦と 練習→ゲーム 2年次: 個人技能練習→チーム 練習→ゲーム 3年次: ゲーム1→移動・作戦 →ゲーム2
	20	土屋十二 (1989.4)	授業づくりのワン・ポイント	小学校 5年生		記載 なし	単元前半: リードアップゲーム →話し合い→ゲーム 単元中盤: ゲーム→練習→ゲー ム 単元終盤: 作戦→ゲーム→作戦 →ゲーム
	21	林 俊雄, 出原泰明 (1989.9)	「うまい子」と「へたな子」の関 係をつくる	小学校 3年生		記載 なし	記載なし
	22	塩貝光生, 出原泰明 (1989.10)	自治的・集団的能力を育てる授 業	中学生		記載 なし	ゲーム(試しのリーグ戦)→班 練習(ゲーム)→ゲーム
1990 年	1	大貫耕一 (1990.2)	パスってすごい!仲間ってすばら しい!! —小学校高学年のサッカー指導	小学校 高学年	パスの重要性を主張	記載 なし	記載なし

1990 年	2	中塚義実 (1990.2)	女子サッカー（高校）	高校3年生 生女子	記載なし	記載なし	個人（各種ゲーム）→第1次リーグ→集団→第2次リーグ
	3	林 恒明 (1990.5)	タマゴ割りサッカーの授業づくり	小学校 2年生	足でボールをける（シュート）	記載なし	タマゴ割りサッカー
	4	林 恒明 (1990.6)	ひよこサッカーの授業づくり	小学校 3・4年生	技術：パス、ドリブル、シュート 戦術：作戦、戦法を学習者が立案	記載なし	ひよこサッカー
	5	梅野圭史、 辻野 昭 (1991.4)	楽しさの発展と学習（内容・活動） の発展を統一させる学習過程を 求めて —課題解決学習（1）—	小学校 6年生		記載なし	記載なし
	6	瀧井敏郎 (1993.11)	サッカー	小学校 低学年	ボールコントロール	技術	鬼ごっこの提案
	7	山内龍雄 (1993.11)	一年生のサッカーの試み—ボール けりやラインサッカーを越えて—	小学校 1年生	対人技術	記載なし	1対1→2対2→4対4
	8	市川英俊、 清水和行 (1994.1)	異学年合同体育の試み —中学年「サッカー、バスケッ トボール」高学年「跳び箱運動」 の実践を通して—	小学校 3・4年生		記載なし	練習→ゲーム→ゲーム
	9	滝 弘之 (1994.6)	教材としてのサッカーを考える	学校体育	小学生→個人技術中心 中学生→グループ戦術中心 高校生→チーム戦術中心	記載なし	ゲーム中心
	10	宮崎昇作 (1994.6)	ドリブル中心の指導	小学生	ドリブル	記載なし	簡単から複雑の段階的配列
	11	遠藤 裕 (1994.6)	工夫した課題ゲームを取り入れ た授業	小学校 6年生	ドリブル、パス	記載なし	ゲーム→課題ゲーム→ゲーム→ 課題ゲーム→大会
	12	根本正雄 (1994.6)	みんながうまくなるラインサッ カー —ローテーションラインサッ カー—	小学校 3年生		記載なし	ポジションのローテーション制 を取り入れたラインサッカー
	13	川城 健 (1994.6)	みんながうまくなるためのサッ カーの授業	中学校 1年生		記載なし	ゲーム中心
	14	田中 譲 (1994.6)	ボールやグラウンドを工夫した サッカーの授業	高校生 1・2年生		記載なし	記載なし
	15	伊藤陽介 (1994.6)	生涯スポーツにつながる選択制 サッカーの授業	高校生		記載なし	ゲーム→練習→練習
	16	根本正雄 (1995.11)	関心・意欲・態度をどう評価す るか	小学校 5年生		記載なし	ラッキーゾーン付きのゲーム
	17	大神田賢 (1996.2)	認め合い、教え合う集団スポー ツの学習	小学校 5年生		記載なし	ゲーム→ミーティング→ゲーム
	18	平野和弘 (1996.2)	連帯し、生きる力をつける定時 制のサッカーの授業	定時制高 校		記載なし	グループ学習：練習→ゲーム
	19	山本雅行 (1996.6)	子どもたちが発見し、つくるサッ カーの授業	小学校 6年生		記載なし	ボール操作→作戦練習→ゲーム →ゲーム分析
	20	梅野圭史 (1996.7)	「めあて学習」を考える比較実験 授業 —サッカーにおける3つの学習 形態から—	小学校 5年生		記載なし	めあて学習：ゲームⅠ→反省 ゲームⅡ 課題形成的学習：3：1→3： 2→4：3→5：5 系統的学習：3：3→5：5→5： 5
	21	浅井康正 (1996.12)	男女差と男女共習を考えた実践 —小学校サッカーの学習から—	小学校	ボール操作能力の向上を保障する重 要性	記載なし	ドリルゲームを位置づける必要 性
	22	長妻美孝 (1998.6)	競技における評価を考える —戦術学習からのアプローチ	小学校 5年生	フリーゾーンでの動き＝速攻、フェ イント フリーになる動き＝トライアング ル、壁/パス ゴール前での動き＝トラップ、走り 込み方	記載なし	ロングフリーゾーンゲーム→ ショートフリーゾーンゲーム
	23	吉野和雄 (1999.4)	自分らしさ、チームらしさを学 級らしさへ（小学校）5年生	小学校 5年生		記載なし	個人→リーグ戦→チーム→ゲー ム→大会
2000 年	1	小川正一 (2000.2)	グリフィンらの戦術学習モデル の検証② —戦術学習について—	小学校 6年生	ボールキープ、トラップ、パス、サ ポート 作戦：システム、ポジション、得点 方法、侵入方法 パス→サポート→シュート→作戦	記載なし	ねらい1：練習→ゲーム→発問 ねらい2：ゲーム→発問→ゲー ム
	2	岡出美則、 小川正一、 長妻美孝、 佐藤隆治、 近藤英基 (2000.3)	小学校6年生のサッカーの授業 におけるサポートの学習の可能 性	小学校 6年生		記載なし	練習→ゲーム
	3	盛島 寛 (2003.1)	サポートを学習の中心にすえた サッカーの授業	小学校 5・6年 生	ドリブルとサポート	記載なし	ドリルゲーム→タスクゲーム→ リーグ戦
	4	河野一則、 吉田昌史 (2003.8)	子ども相互の関わり合いを重視 した中学年のサッカーゲーム	小学校 4年生	記載なし	記載なし	練習→ゲーム→反省

2000 年	5	船富公二 (2004.12)	誰でも楽しく学べて上手くなる 「じゃまじゃまサッカー」と教育 課程試案	小学校	ドリブル：ヘッドアップ、タッチす る部位 パス：方向、強さ、タイミング サポート：方向、タイミング	記載 なし	じゃまじゃまサッカー
	6	三浦清司 (2006.6)	白熱した試合を展開したサッ カーの授業	中学校	記載なし	記載 なし	ゲーム→練習→ゲーム
	7	柴田一浩 (2008.5)	中村先生のサッカーの授業	中学校	キック、トラップ、ドリブル	記載 なし	記載なし
	8	高橋健夫、 末永祐介、 堀邊英明 (2008.6)	ドリルゲームとタスクゲームで 楽しくゲームパフォーマンスを 高めよう	中学校	ドリルゲーム：ドリブル、シュート タスクゲーム：シュート、パス、キ ープの判断 サポート→スペース→動き直し	記載 なし	ドリルゲーム→タスクゲーム→ ゲーム
	9	岩田 靖、 菅沼太郎 (2008.12)	もっと楽しいボール運動②「セ ンタリング・サッカー」の教材 づくり	小学校 5年生	センタリング、有効空間からの シュート、サポート	記載 なし	練習→ゲーム①→反省→ゲーム ②→反省→ゲーム③→反省
	10	高橋健夫、 八城雅彦 (2008.12)	女子生徒が熱狂するフットサル- 中学校1年生-	中学校 1年生	ドリブル、ボールコントロール、パ ス	記載 なし	個人→ゲーム→チーム→ゲーム →リーグ戦
	11	吉永武史、 馬場智哉 (2009.9)	サポートを学習による小学校5 年生のサッカーの授業実践とそ の成果	小学校 5年生	パス、トラップ、サポート	記載 なし	ボール慣れ運動→ドリルゲーム →タスクゲーム→ゲーム
	12	高橋健夫、 高田俊也、 三浦清司 (2009.9)	off the ball の動きをみにつけて Qualitative Soccer を楽しもう	中学校 3年生	サポート	記載 なし	準備運動→タスクゲーム
	13	高橋健夫、 藤野博文 (2010.5)	すぐれたゲームパフォーマンス はon the ball + off the ball の学 習から	中学校 2年生	パス、ドリブル、トラップ、シュ ート	記載 なし	スキルウォームアップ→タスク ゲーム（3対2→4対4）→メ インゲーム（4対4→7対7）
	14	椎名 望 (2011.3)	ゴール型ゲームの教具づくりと 「フットホッケー」の実践	小学校	記載なし	記載 なし	フットホッケーの提案
	15	酒本絵梨子、 堀 美歌 (2011.6)	ゴール型ゲームにおける「攻防」 の楽しさを学ぶ実践	小学生	低学年：キープ 中学年：キック 高学年：サポート	記載 なし	ゲーム
	16	加納岳拓、 岡野 昇 (2011.10)	「学び」を深めるペアサッカーの 実践	小学校 5年生	記載なし	記載 なし	ゲームⅠ：手をつないで赤が ボールを触る ゲームⅡ：赤が出場し、白が指示 ゲームⅢ：白が出場し、赤は観察

*抽出方法は、学習指導要領や児童の実態以外から抽出している物を対象としたため、それ以外のものは記載なしとした。

4. 考 察

「体づくり期」「楽しい体育期」における報告内容から、我が国の学校体育におけるサッカー指導では、学習者がサッカーの特質に触れることができることに主眼を置き、教育内容及び教材が構成されてきた捉えることができる。

各期の教育内容についてみると、「体力づくり期」は技術を中心に位置づけられていたが、「楽しい体育期」に入ると技術と戦術の両方を位置づけるものが増えてきており、教育内容に戦術を位置づける重要性が増してきているといえる。これは技術だけでは、試合でその技術をいつ、どこで、どのように使用すればいいのかということについて学ぶことが困難であり、それを解決するために戦術を用いて試合におけるプレーの仕方を学ぶことの重要性が増加していくようになったと考えられる。すなわち、技術を戦術と結びつけることによって試合で適切に発揮するということが重要視されるようになったといえる。

次に、教材の構成についてみると、個人の技術や戦術といったものを習得し、それを集団に応用するあるいはグループで戦術を共有し、最終的にゲームでパフォーマンスを発揮するといった教材構成が体力づくり期では主流であった。しかし、「楽しい体育期」では、ゲーム

による学習の中で現れる課題を練習で改善するといったゲーム中心の教材構成が多数を占めていた。このように、両時期では教材構成の内容は異なるものの、ゲームでのパフォーマンスを向上させることを意図して教材構成するということは通底していると考えられる。ゲームでパフォーマンスを向上させることは、学習者にサッカーの技術や戦術のより高度な認識や実践を生み出し、サッカーへの興味や関心を引き出すことにつながる。したがって、ゲームパフォーマンスを向上させることは、学習者がサッカーという文化の理解への契機として捉えられるため、ゲームで技術や戦術を実践できるようになることは現代においても重要な点であるといえる。

しかし、『体育科教育』で報告されてきた学校体育を対象としたサッカー指導方法及び指導実践には、以下のような課題が挙げられる。

第一に、多くの先行研究における教育内容の抽出方法が、学習指導要領に準じるものや、学習者の実態から位置づけているものが主となっており、丹下ら（1963）を除いて指導方法及び指導実践の中では明確に示されていなかった点である。教育内容抽出のためには、サッカーの技術・戦術を構造化する必要があると考える。このサッカーの技術・戦術を構造化して捉えることは、指導における教育内容を明確にできること、教育内容を系統的かつ攻防の関係性を十分に踏まえ、抽出することが出来る

ことを可能にする⁴⁾。

報告のなかには、技術体系を検討しているもの（丹下ら、1963；多和、1968；浅見、1970）もあったが、それらの報告では主として攻撃に関する技術を体系化していた。しかし、サッカーは攻撃と守備が相互関連して存在している競技であることから、サッカーの技術を体系化するには攻撃と守備の両面から検討する必要性という課題がある⁵⁾。

また、技術や戦術の体系については、現代の球技に関する戦術論において、個人戦術、グループ戦術、チーム戦術には相互関連があることが指摘されており⁶⁾、サッカーにおいてもこれらの戦術は相互関連して捉える必要がある。加えて、サッカーのフィールドには特性が内包されていると考えられ、この点に関しても構造に含める必要があるといえる。そのため、サッカーの技術や戦術の関係性、フィールドの特性を踏まえたサッカーの技術・戦術の構造を構築することが必要である。

第二に、教材の順序が攻防の相互作用と戦術の関係性の両側面から構成がされていない点である。先行研究を大別すると、「技術・戦術練習→ゲーム」あるいは「ゲームを中心に据えて学習課題を練習で改善する」という教材構成によって授業が展開されている。しかし、先述したように、サッカーには攻防の相互作用や戦術の関係性が内在化されているため、これらの観点も教材構成に反映する必要がある。「攻防の相互作用」を検討することは、教材を構成する際に攻撃と守備における技術・戦術的矛盾関係を創出し、それを乗り越えるために新たな戦術を獲得するといった学習における必然性を生むことを可能にすると考えられる。また、戦術の関係性を活用することは、チーム戦術から学習することにより、複雑で偶発性の存在と考えられるゲームをチーム戦術という単位の秩序を持って臨むことにより、チームの構成員の立場からゲームを行うことに繋がり、そこから生まれる課題がチームとしての課題なのか、グループに課題があるのか、あるいは個人の技術や戦術にあるのかをチームで認識しやすくなる効果も望めると考えられられる。そのため、教材の構成を攻防の相互作用や戦術の関係性から構成するといった構成方法が検討される必要があると考えられる。

第三に、多くの研究ではサッカーの面白さが得点を奪うことにありとて攻撃の技術や戦術の習得に多くの時間を費やしている。しかし、先述したようにサッカーには守備の局面が存在し、守備で相手のボールを奪うことにより攻撃へと展開することが出来るため、守備の技術や戦術の教育内容を位置づけることを十分に検討する必要があるといえる。また、守備の教育内容を学習することのメリットとしては、前線の高い位置でボールを奪う事が、相手の守備の組織が整っていない状況で攻撃を仕掛けることを可能とし、攻撃の推進力や得点の機会の創出にもつながると考えられる。そのため、サッカーの学

習においては、攻撃だけではなく、守備の技術・戦術指導に関する教育内容や教材を位置づける必要性がある。

5. まとめ

本研究では、雑誌『体育科教育』におけるサッカーの指導方法及び指導実践における教育内容と教材の構成方法の変遷について検討した。本研究の対象としてきた指導方法及び指導実践では、技術だけではなく、戦術を教育内容に位置づけることの重要性の増大と、ゲームにおける学習者のパフォーマンスを向上させること、そして、学習者がサッカーの特質に触れながらも、ゲームパフォーマンスを向上させるために教育内容を設定し、教材を構成しようと試みていた。

しかし、次の点において課題があると考えられた。1点目は教育内容を抽出するためのサッカーの技術や戦術の構造を明らかにする必要があること、2点目は教材の順序を攻防の相互作用と戦術の関係性から構成する必要があること、3点目は守備における技術や戦術の教育内容の位置づけと教材構成の再検討することの3点が課題として挙げられる。

6. 今後の課題

現代サッカーは、日々発展している。そのため、サッカーの技術や戦術の構造を明らかにするために、トップレベルの大会を対象とし、そこで用いられているサッカーの技術や戦術を整理し、サッカーの技術や戦術の構造を明らかにすることが必要であるといえる。そして、その構造から、時間数や学習者の実態に応じた教育内容を抽出し、それを担った教材を構成し、実験授業等による授業実践によって検証することが必要であると考え

注

- 1) 友添（2010）は学習指導要領の目標の変遷を「新体育の目標（1947年要綱、1949、1953年要領）」「体力づくりを重視した目標（1958、1968年要領）」「楽しさを重視した目標（1977、1988、1998、2008年要領）」の3段階に分類して捉えている（友添、2010、pp. 40-43）。本研究では友添（2010）の分類と同義で、「体力づくりを重視した目標」を「体力づくり期」と称し、「楽しさを重視した目標」を「楽しい体育期」として論述する。
- 2) 本研究における教育内容とは「現代科学の一般的・基本的概念や法則の中から、授業過程の中で、すべての生徒に教えることが可能であるという検証を経たものによって構成される」という高村（1987）の教授学理論を首肯しつつ（高村、1987、p12）、体

- 育の運動学習における教育内容について提起している進藤（2003）の「あるスポーツ種目やその運動材に含み込まれている学習者に認識し習得されるべき客観的な法則性を持った技術や戦術」という規定に依拠する（進藤，2003，p. 70）。
- 3) 本研究における教材とは、「教育内容をにう実体として、子どもの認識活動の直接的な対象であり、科学的概念や法則の確実な習得を保障するために必要な（事実，資料，教具）」という高村（1986）の教授学理論を首肯しつつ（高村，1986，p56），体育の運動学習における教材について提起している進藤（2003）の「教育内容としての客観的な運動技術を確実に認識，習得するために学習者が直接的に働き掛ける運動材（運動課題）」という概念規定に依拠する（進藤，2003，p. 70）。
 - 4) 竹田（2002）は，高村（1987）の提起した教授学理論を体育授業に応用し，運動指導における教授過程について言及している。そこにおいては，教育内容が「現代科学の構造」から抽出されることを述べている。その「現代科学の構造」は，高村（1987）が「科学的知識を蓄積し体系化」している構造であるとしている（高村，1987，p. 7）。すなわち，サッカーにおいては，技術や戦術が蓄積し体系化されている構造といえる。その構造から，教育内容を抽出することにより，教育内容の関係性，系統性等が明確になるといえる。そのため，教育内容を明確に捉えるためには，サッカーの技術・戦術構造を提起する必要があると考える。
 - 5) 攻防の相互作用について久世（1988）は，「球技における諸種目の戦術を最初に特質付けるのが，攻撃側の得点行動に対する反撃行動である。その後攻撃戦術は防御戦術が反撃行動へ移行することによって，必然的に質的發展を引き起こす。さらに攻撃戦術の発展が防御戦術の発展を促す」と述べている。また，これは教育内容を構成する際の有効な視点であることを竹田（2002）は述べている。
 - 6) デーブラー（1985）は「個人的なプレーイング行動はそれ自体が目的となるものではない。それは何かをしようとする意志や目的にそってグループ行動にまとめられなければならないのであるが，そのグループ行動はさらにすべてのチーム戦術に組み込まれるものである」とし戦術が相互関連していると指摘している（デーブラー，1985，p. 265）。
- 文 献
- 秋葉幸次郎・森昭二（1966）二年生のサッカー。体育科教育，14（12）：29-32。
- 浅見俊雄（1970）サッカーの技術構造とスキルテスト。体育科教育，18（2）：40-43。
- 青木真（1985）競争を支える学習環境6・サッカーの授業づくり1。体育科教育，33（9）：66-69。
- 青木真（1985）競争を支える学習環境6・サッカーの授業づくり2。体育科教育，33（10）：66-69。
- 浅井康正（1996）男女差と男女共習を考えた実践—小学校サッカーの学習から—。体育科教育，44（15）：70-72。
- 遠藤裕（1994）工夫した課題ゲームを取り入れた授業。体育科教育，42（7）：36-38。
- 船富公二（2004）誰でも楽しく学べて上手くなる「じゃまじゃまサッカー」と教育課程試案。体育科教育，52（14）：38-42。
- 原口雅之（1988）個人差をゲームの中でどう生かすか—小学校六のサッカー。体育科教育，36（12）：51-54。
- 林俊雄・出原泰明（1989）「うまい子」と「へたな子」の関係をつくる。体育科教育：37（9）：60-65。
- 林恒明（1990）タマゴ割りサッカーの授業づくり。体育科教育，38（5）：70-73。
- 林恒明（1990）ひよこサッカーの授業づくり。体育科教育，38（6）：62-64。
- 平野和弘（1996）連帯し，生きる力をつける定時制のサッカーの授業。体育科教育：44（2）：51-53。
- H.デーブラー・稲垣安二・上平雅史監訳，谷釜了正訳（1985）球技運動学。不昧堂出版：東京。
- 細江文俊（1988）「基礎・基本」の充実から「個性化」教育への授業づくり-船橋市立八木が谷中学校の実践①。体育科教育，36（5）：75-80。
- 細江文俊・川城健（1988）サッカーの場づくりに着目した個に合わせる指導の工夫。体育科教育，36（7）：68-72。
- 堀江邦昭（1983）全員で楽しめるサッカー型授業の作り方。体育科教育，31（11）：49-51。
- 堀江邦昭（1987）学級集団の活性化とグループの再編。体育科教育，35（4）：39-41。
- 堀江邦昭（1987）学習形態を工夫した体育の授業—チーム目標達成をめざして—。体育科教育8月増刊号，35（9）：58-60。
- 市川英俊・清水和行（1994）異学合同体育の試み—中学「サッカー，バスケットボール」高学「跳び箱運動」の実践を通して—。体育科教育，42（1）：75-79。
- 伊藤陽介（1994）生涯スポーツにつながる選択制サッカーの授業。体育科教育，42（7）：49-52。
- 岩田靖・菅沼太郎（2008）もっと楽しいボール運動②「セントリング・サッカー」の教材づくり。体育科教育，56（13）：58-63。
- 金子清（1987）ラインサッカー。体育科教育，35（9）：40-45。
- 加納岳拓・岡野昇（2011）「学び」を深めるペアサッカーの実践。体育科教育，59（11）：44-47。
- 川城健（1988）ボール運動の学習過程をどう工夫したら

- よいか—小学校五年生のサッカーを例に. 体育科教育, 36 (12): 35-37.
- 川城健 (1994) みんながうまくなるためのサッカーの授業. 体育科教育, 42 (7): 42-44.
- 北島豊 (1961) 四年生の指導. 体育科教育, 9 (2): 44-46.
- きし・さとる (1984) サッカーの学習における教師の指導力. 体育科教育, 32 (9): 46-49.
- 小林勝意 (1959) サッカーの策戦指導について. 体育科教育, 7 (11): 56-59.
- 河野一則・吉田昌史 (2003) 子ども相互の関わり合いを重視した中学のサッカーゲーム. 51 (8): 73-75.
- 松田輝幸 (1972) サッカー. 体育科教育, 20 (9): 43-44.
- 松田源恵 (1962) ポートボールとラインサッカー. 体育科教育, 10 (1): 41-43.
- 松本光弘 (1982) サッカー. 体育科教育, 30 (3): 46-48.
- 宮崎昇作 (1994) ドリブル中心の指導. 体育科教育, 42 (7): 33-35.
- 盛島寛 (2003) サポートを学習の中心にすえたサッカーの授業. 体育科教育, 51 (1): 62-65.
- 三浦清司 (2006) 白熱した試合を展開したサッカーの授業. 体育科教育, 54 (5): 51-55.
- 永嶋正俊 (1962) 写真による実技指導サッカー. 体育科教育, 10 (11): 42-46.
- 永嶋正俊 (1967) 体育館でできるサッカー. 体育科教育, 15 (2): 45-48.
- 永嶋正俊 (1973) ミニサッカーについて. 体育科教育, 21 (6): 40-41.
- 永嶋正俊 (1984) ボール運動の重点教材. 体育科教育, 32 (3): 49-51.
- 長妻美孝 (1998) 競技における評価を考える—戦術学習からのアプローチ. 体育科教育, 46 (9): 35-37.
- 長妻美孝・佐藤隆治・近藤英基 (2000) 小学校6年生のサッカーの授業におけるサポートの学習の可能性. 体育科教育, 48 (4): 46-48.
- 中塚義実 (1990) 女子サッカー (高校). 体育科教育, 38 (2): 48-51.
- 中村政一郎・嘉戸脩 (1989) 画一的な学習活動から多様な学習活動への試み. 体育科教育, 37 (1): 53-58.
- 中村敏雄 (1972) サッカー指導における第一の段階. 体育科教育, 20 (12): 60-61.
- 中村敏雄・菊池浄 (1973) サッカーの授業—小学校6年. 体育科教育, 21 (4): 30-38.
- 中村康弘 (1987) サッカー—チーム再編成について. 体育科教育8月増刊号, 35 (9): 102-104.
- 中村康弘 (1988) ボール運動における場づくりの工夫を中心に. 体育科教育, 36 (8): 33-35.
- 根本正雄 (1994) みんながうまくなるラインサッカー—ローテーションラインサッカー—体育科教育, 42 (7): 39-41.
- 根本正雄 (1995) 関心・意欲・態度をどう評価するか. 体育科教育, 43 (12): 42-44.
- 西田猛男 (1962) サッカー基礎技術の能率的な指導について. 体育科教育, 10 (3): 44-45.
- 西田猛男 (1962) サッカー教材の問題点とその指導方法について. 体育科教育, 10 (11): 48-50.
- 西沢宏 (1966) 子どものための教材づくり—小学校のサッカーについて/その1. 体育科教育, 14 (9): 58-61.
- 西沢宏 (1966) 子どものための教材づくり—小学校のサッカーについて/その2. 体育科教育, 14 (12): 48-52.
- 小川正一 (2000) グリフィンらの戦術学習モデルの検証②—戦術学習について—. 体育科教育, 48 (3): 64-66.
- 岡田和雄 (1974) 私の授業と指導案の工夫—教えることと考えさせること. 体育科教育, 22 (4): 61-63.
- 岡田和雄, 平林宏美, 藤井喜一 (1981) 低学のサッカー遊び・その1—一年生のボールけりあそび. 体育科教育, 29 (4): 32-37.
- 岡出美則・小川正一・長妻美孝・佐藤隆治・近藤英基 (2000) 小学校6生のサッカーの授業におけるサポートの学習の可能性. 体育科教育, 48 (4): 46-48.
- 奥山英虎 (1976) わかる授業の方法を探って—体育の授業と理科の授業. 体育科教育, 24 (10): 47-48.
- 小野久夫 (1962) 「簡易サッカー」. 体育科教育, 10 (2): 46-47.
- 大淵正雄 (1963) 中学校・サッカーの指導. 体育科教育, 11 (12): 50-52.
- 大神田賢 (1996) 認め合い, 教え合う集団スポーツの学習. 体育科教育, 44 (2): 45-47.
- 大熊豊蔵 (1967) サッカー. 体育科教育, 15 (2): 37-39.
- 大貫耕一 (1990) パスってすごい! 仲間ってすばらしい!!—小学校高学級のサッカー指導. 体育科教育, 38 (2): 41-43.
- 佐野雅孝 (1973) ラインサッカーからサッカーへ. 体育科教育, 21 (11): 48-49.
- 酒本絵梨子・堀美歌 (2011) ゴール型ゲームにおける「攻防」の楽しさを学ぶ実践. 体育科教育, 59 (6): 42-46.
- 関川正巳 (1988) ボール運動の授業をどう評価するか. 体育科教育, 36 (12): 48-51.
- 柴田一浩 (2008) 中村先生のサッカーの授業. 体育科教育, 56 (5): 64-65.
- 椎名望 (2011) ゴール型ゲームの教具づくりと「フットホッケー」の実践. 体育科教育, 59 (3): 38-40.
- 進藤省次郎 (2003) バレーボールの初心者に対するパス

- の技術指導. 北海道大学大学院教育学院研究科紀要, 89: 53-72.
- 邨上悦夫 (1961) 五年生の指導. 体育科教育, 9 (3): 43-46.
- 宗野文俊・佐藤亮平 (2014) 学習指導要領におけるボールゲームでの技能内容の変遷に関する研究—「ゴール型」ゲームにおける「集団的技能」に着目して—, 北海道大学大学院教育学院要, (120): 137-158.
- 須貝光一 (1960) サッカーの初歩の扱い. 体育科教育, 8 (2): 56-60.
- 須貝光一 (1961) サッカー指導の問題点とその取扱い法—小学校—. 体育科教育, 9 (10): 28-30.
- 塩貝光生・出原泰明 (1989) 自治的・集団的能力を育てる授業. 体育科教育, 37 (10): 66-72.
- 鈴木勇作 (1961) サッカー指導の問題点とその取扱い法—中学校—. 体育科教育, 9 (10): 31-33.
- 高橋健夫・末永祐介・堀邊英明 (2008) ドリルゲームとタスクゲームで楽しくゲームパフォーマンスを高めよう. 体育科教育, 56 (6): 76-77.
- 高橋健夫・八城雅彦 (2008) 女子生徒が熱狂するフットサル—中学校1年生—. 体育科教育, 56 (13): 70-71.
- 高橋健夫・高田俊也・三浦清司 (2009) off the ball の動きをみにつけてQualiative Soccerを楽しもう. 体育科教育, 57 (11): 73.
- 高橋健夫・藤野博文 (2010) すぐれたゲームパフォーマンスはon the ball + off the ballの学習から. 体育科教育, 58 (6): 74-75.
- 高田典衛・西沢宏・庄司正治郎 (1965) 小学校のサッカーの教材づくり. 体育科教育, 13 (12): 22-27.
- 高村泰雄 (1986) 教授過程の基礎理論. 講座・日本の教育6. 新日本出版社, pp. 41-68.
- 高村泰雄 (1987) 物理教授法の研究—授業書方式による学習指導法の改善—. 北海道大学図書刊行会.
- 竹田唯史 (2002) 生涯学習へ発展する体育授業の試み (2)—高村泰雄の教授理論に基づく科学的授業研究の方法論—. 『北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要<生涯学習研究と実践>』, 3: 41-49.
- 滝弘之 (1994) 教材としてのサッカーを考える. 体育科教育, 42 (7): 19-21.
- 瀧井敏郎 (1993) サッカー. 体育科教育, 41 (12): 52-54.
- 田中譲 (1994) ボールやグラウンドを工夫したサッカーの授業. 体育科教育, 42 (7): 45-48.
- 丹下保夫・浅海公平 (1963) 体育指導の理論と実際/その2 運動技術の指導と系統 (上)・サッカーを中心として. 体育科教育, 11 (5): 34-44.
- 丹下保夫・浅海公平 (1963) 体育指導の理論と実際/その3 運動技術の指導と系統 (下). 体育科教育, 11 (6): 42-49.
- 多和健雄 (1957) サッカーの技術指導—始めてサッカーを教える教師のための手引き—. 体育科教育, 5 (2): 63-67.
- 多和健雄 (1957) 中学校のサッカーでは, 何を, どこまでどのように, 指導したらよいか. 体育科教育, 5 (11): 63-67.
- 多和健雄 (1959) サッカー系のボールゲームについて. 体育科教育, 7 (1): 38-44.
- 多和健雄 (1960) 中学校のサッカー. 体育科教育, 8 (11): 49-52.
- 多和健雄 (1961) サッカー指導の問題点とその取扱い法—高等学校—. 体育科教育, 9 (10): 34-35.
- 多和健雄 (1968) サッカーの技術構造. 体育科教育, 16 (2): 43-45.
- 高山博 (1963) 高校・サッカーの指導. 体育科教育, 11 (12): 53-55.
- 寺崎五郎 (1976) ゲーム中心とした小学校のサッカー. 体育科教育, 24 (10): 66-68.
- 塚田実 (1962) 「簡易サッカー」. 体育科教育, 10 (1): 38-39.
- 土屋十二 (1989) 授業づくりのワン・ポイント. 体育科教育, 37 (4): 49-51.
- 友添秀則 (2010) 体育の目標と内容. 高橋ほか編, 新版 体育科教育学入門. 大修館: 東京, pp. 30-38.
- 豊田恭久 (1970) 運動技術と体力の育成—サッカーを通して—. 体育科教育, 18 (11): 56-59.
- 宇土正彦・大日方義久 (1976) 体育授業の絶対的基準を探る. 体育科教育, 24 (4): 43-48.
- 梅野圭史・辻野昭 (1991) 楽しさの発展と学習 (内容・活動) の発展を統一させる学習過程を求めて—課題解決学習 (1) —. 体育科教育, 39 (4): 54-57.
- 梅野圭史 (1996) 「めあて学習」を考える比較実験授業—サッカーにおける3つの学習形態から—. 体育科教育, 44 (7): 37-40.
- 山内龍雄 (1993) 一年生のサッカーの試み—ボールけりやラインサッカーを越えて—. 体育科教育, 41 (12): 72-74.
- 吉永武史・馬場智哉 (2009) サポートを学習による小学校5生のサッカーの授業実践とその成果. 体育科教育, 57 (11): 17-19.
- 吉野和雄 (1999) 自分らしさ, チームらしさを学級らしさへ (小学校) 5年生. 体育科教育, 47 (5): 29-31.
- 山本雅行 (1996) 子どもたちが発見し, つくるサッカーの授業. 体育科教育, 44 (6): 47-49.
- 財団法人日本サッカー協会 (2014) 『サッカー指導の教科書』. 東洋出版社: 東京.

〔平成27年4月11日 受付〕
〔平成27年9月10日 受理〕